他者からの期待が記憶に与える影響とその個人差

○長澤勇貴¹・平田 歩^{2#}・塩田翔一^{3,4}・月浦 崇¹

(¹京都大学大学院人間・環境学研究科²京都大学総合人間学部³京都大学大学院教育学研究科⁴日本学術振興会特別研究員)

キーワード: 期待, 目標設定, エピソード記憶

Episodic memory modulated by expectation from others and its individual differences

Yuki NAGASAWA¹, Ayumu HIRATA², Syouichi SHIOTA^{3,4}, and Takashi TSUKIURA¹

(¹Graduate School of Human and Environmental Studies, ²Faculty of Integrated Human Studies, ³Graduate School of Education, Kyoto University, ⁴Japan Society for the Promotion of Science)

Key Words: expectation, goal-setting, episodic memory

目 的

他者からの期待によって、認知機能や課題遂行に関係する目標設定は影響を受ける。先行研究では、他者からの期待は目標設定に対して促進的あるいは抑制的な影響を与え (Rosenthal & Jacobson, 1968; Tyler, 1958), 目標設定は記憶に対して促進的な影響を与えることが示されている (West, Bagwell, & Dark-Freudeman, 2005)。しかし、他者からの期待が目標設定を介してエピソード記憶にどのような影響を与えるのかについては明らかではない。本研究では、この点について健康若年成人を対象として実験心理学的に検証した。

方 法

実験参加者 健康な男子大学生、大学院生 40 名が本研究に参加した。すべての実験参加者は友人とペアでリクルートされ、それぞれが期待目標群と目標群 (後述) ヘランダムに割り付けられた。

刺激 漢字 2 字から成る日本語の単語データベース (敵島・石原・永田・小池, 1991) から 240 単語を使用した。これらが 60 語ずつ 4 つのリストに分割され、それぞれのリストが後述する 2 ランの記憶課題のターゲットとディストラクター刺激に割り当てられた。これらのリストは実験参加者間でカウンターバランスされた。

実験手続き 実験参加者は、記銘と想起から構成される記憶課題を異なる刺激を用いて 2 ラン行った。また、1 ランと 2 ランの間には目標設定を行った (Figure 1)。

各ランの記銘課題では、実験参加者は 60 個の単語がランダムに 1 つずつ提示され、フォント判断をしながら単語を記銘するように求められた。想起課題では、実験参加者はターゲット単語 60 個とディストラクター単語 60 個がランダムに 1 つずつ提示され、ターゲット単語を再認した。

ランとランの間に実施する目標設定では、期待目標群に割り付けられた実験参加者は、「一緒に実験に参加している友人によって、あなたが次の記憶課題で示すと期待される正答率が推定される」という教示が与えられた後に、次ランの記憶課題での正答率の目標を設定するように求められた。他方、目標群に割り付けられた実験参加者は、単に次ランの記憶課題での正答率の目標設定だけを行うように求められた。

最後に、すべての実験参加者は 10 cm の Visual Analogue Scale (VAS) を用いて、各ランの目標設定の大きさなど記憶課題に関する質問紙と、共感性を評価する日本語版 IRI (日道他, 2017) などの社会的特性に関する心理検査に回答した。

Figure 1. 課題の概略図

解析 期待目標群 19 名と目標群 18 名のデータが解析された。

各ランにおける Hit 率と False Alarm (FA) 率が算出され、Hit 率と FA 率の差分値が各ランにおける記憶成績と定義された。さらに、ラン 2 とラン 1 の記憶成績の差分値をラン 1 の記憶成績で除算した値が記憶成績の変化率と定義された。VAS の評価値に関しては、ラン 2 の評価値からラン 1 の評価値を差し引いた変化量が算出された。

結 果

記憶成績の変化率に対して、2 群間で等分散性の検定を行った結果、期待目標群の分散は目標群の分散と有意に異なることが認められた [$F(18,17)=2.72, p<.05$] (Figure 2a)。各群において、記憶成績の変化率と目標の大きさの変化量との間で相関解析を行った結果、期待目標群では有意な相関は認められず ($r=.09, p=.70$)、目標群では有意な正の相関が認められた ($r=.59, p<.01$) (Figure 2b)。さらに、期待目標群を記憶が向上した群と低下した群に分類し、それぞれの群で記憶成績の変化率と目標の大きさの変化量との間で相関解析を行った結果、記憶が低下した群でのみ、有意な負の相関が認められた ($r=-.79, p<.05$) (Figure 2c)。また、同様に記憶成績の変化率と心理検査の結果との間で相関解析を行った結果、記憶が低下した群において、記憶成績の変化率と IRI の Personal Distress の項目の得点との間で有意な負の相関が認められた ($r=-.71, p<.05$) (Figure 2d)。

Figure 2. 結果の図

考 察

本研究の結果から、他者からの期待を感じることで目標設定がエピソード記憶に対して促進的あるいは抑制的な影響を与えることが示唆された。また、他者からの期待が記憶に対して抑制的に作用する場合には、共感性の個人差が関連する可能性が考えられた。

引用文献

- 敵島行雄・石原治・永田優子・小池庸生 (1991). 漢字二字名詞 600 語の諸属性調査: 象心性, 具象性, 学習容易性. 日本大学心理学研究, 12, 1-19.
日道俊之・小山内秀和・後藤崇志・藤田弥世・河村悠太・野村理朗 (2017). 日本語版対人反応性指標の作成. 心理学研究, 88, 61-71.
Rosenthal, R., & Jacobson, L. (1968). Pygmalion in the classroom. *The Urban Review*, 3, 16-20.
Tyler, B. B. (1958). Expectancy for eventual success as a factor in problem solving behavior. *Journal of Educational Psychology*, 49, 166-172.
West, R. L., Bagwell, D. K., & Dark-Freudeman, A. (2005). Memory and goal setting: The response of older and younger adults to positive and objective feedback. *Psychology and Aging*, 20, 195-201.

*本研究の一部は、JSPS 科研費 JP17H05947, JP16K04423 の助成を受けて実施された。